

令和七年度 お茶の水女子大学

学校推薦型選抜 帰国生徒・外国学校出身者特別選抜 高大連携特別選抜 試験問題

文教教育学部 人文科学科(哲学・倫理学・美術史) 小論文

【問題1】 以下の文章を読んで、その後の問いに答えなさい。

あらためて「倫理」とは何でしょうか。確かに安楽死や臓器移植問題に関する「生命倫理」、日本原子力学会が設けている「日本原子力学会倫理委員会」など、時折耳にする言葉ではあります。しかし、いざその意味はと問われると、一言で言い表すのは容易ではありません。時代とともに、また文化によっても、その意味は変わるでしょう。

本論では、その意味するところを、「道徳」との違いを手がかりにして明確にしたいと思えます。倫理と道徳の違い？ 同じ意味じゃないの？ そう思われるのももつともです。実際、大辞林で「倫理」を引くと、「人として守るべき道。道徳」とあり、両者がほとんど同じ意味で使われていることが分かります。一般的にも、またアカデミックスな議論の場でも、両者の区別は必ずしも徹底されているわけではありません。

しかし、哲学者や倫理学者のなかには、道徳と倫理のあいだに区別を設ける立場の専門家もいます。もちろん両者のあいだには重なる部分もあるのですが、明確に異なる側面もある。本書では、こうした両者を区別する専門家たちの議論を参考にしたいと思います。なぜなら、現代の複雑化した世界において、その区別はますます重要になってきているように思えるからです。

両者の違いを説明するまえに、ひとつエピソードを紹介させてください。それは私にとって、その違いを痛いほど思い知らされた出来事でした。

当時小学三年生だった息子をつれて、アメリカに出張に行ったときのことです。ハーレーダビッドソンで有名なアメリカ中西部のウィスコンシン州、その中南部に位置するマディソンという湖畔の街で学会が開かれることになっていました。

ホテルに到着し、買い物がてら街を散歩したときのこと。向こうから、四〇代くらいの太った女性がふらふらと揺れながらこちらに近づいてきます。乱れた身なりと手を差し伸べている様子から、物乞いをしようとしていることがすぐに分かりました。

私はとっさに息子の手をぐいと引いて、その女性を避けるように通りの反対側に渡ってしまいました。自分ひとりならまだしも、子供もいる状況で、何かよくないことに巻き込まれたら大変だ。その一心でした。

その直後でした。息子がパニックを起こしたように大泣きをし始めたのは。なぜ、お母さんはあの人を助けなかったのか。なぜ、かわいそうな人にあんな仕打ちをするのか。ぼくがもし病気になったり障害を持ったりしたら、みんなに冷たくされるのか。あの人には、すぐ悲しそうな声で、「ソーリー」と言っていたじゃないか。あの方がぼくの心に残って離れない。とても悲しい。苦しい。そして、息子は何度もこう繰り返したのです。「この気持ちは一生残っちゃうと思う。お母さん、何とかして」。

私は懸命に説明を試みました。世の中には困っている人がたくさんいて、すべての人に施し物をするとはできない。その代わりに「税金」という制度があって、その「みんなからちよつとずつ集めたお金」を使って、困っている人を助ける仕組みになっている。それに、あの人にお金をあげたとしても、お酒を買ってしまったらして、あの人のためにならないかもしれないよ。

案の定、私の説明は息子にはひとつもとどきませんでした。結局、ホテルに帰っても一時間くらい大声で泣き続けることになりました。

「困っている人がいたら助けましょう」。これが小学生の頭の中にある行動規範です。なぜなら学校の授業でそう習ってきたし、そうすべきだと自分でも心がけてきたからです。世界は、困っている人が当然のように助けられる場所だと思っていた。

それなのに、その絶対的なルールを、一番身近な大人である母親が目の前でやぶったのです。パニックになるのも無理はありません。

もちろん、私も「困っている人は助けるべきだ」ということは理解していたつもりです。けれども、あの状況でそれに従うことはできなかったし、従うのが最善ではないかもしれないということ、つまりこの規範がそれほど絶対的ではないということも、いつの間にか知っていました。「困っている人は助けるべきだ」は「タテマエ」であって、「ホンネ」は別にある。そんなふうに考えていました。

要するに、私と息子は、道徳と倫理のあいだで引き裂かれていたのでした。小学校の道徳の授業で習うような、「〇〇しなさい」という絶対的で普遍的な規則。これに対し倫理は、現実の具体的な状況で人がどう振る舞うかに関わります。相手が何者か分からず、自分の身を守る必要もあり、時間やお金の余裕が無限にあるわけではない今。この状況で、どう振る舞うことがよいのか。あるいは少しでもマシなのか。倫理が関わるのはこういった領域です。

哲学者のアラン・バディウは、その名も『倫理』という本のなかでこう述べています。「倫理を抽象的範疇（人間、権利、他者……）に結びつけるのではなく、むしろ、さまざまな状況へ差し戻すことにしよう」。そしてバディウは言います。倫理に「一般」などというものはない、と。なぜなら状況が個別的であるのに加えて、判断をする人も、それぞれに異なる社会的、身体的、文化的、宗教的条件のなかに生きており、その個別の視点からしか、自分の行動を決められないからです。「倫理『一般』などないとすれば、それは倫理『一般』で自己を武装せねばならない抽象的な主体などないからだ」。

哲学や倫理学のような学問の領域に限らず、社会生活のさまざまな場面で、私たちがものごとを一般化して、抽象化して捉えてしまいがちです。「人間」「身体」「他者」という言葉。ほんとうは、そんなものは存在しません。それぞれの人間は違うし、それぞれの身体は違うし、それぞれの他者は違っていきます。

けれどもついついその差異を無視して「人間一般」「身体一般」「他者一般」について語り、何かの問題を扱ったような気になってしまう。もちろん、道徳が提示する普遍的な視点を持つことも重要です。そうでなければ、人は過剰に状況依存的になってしまい、その場まかせの行動をすることになってしまいうでしょう。けれども、「一般」として指し示されているものは、あくまで実在しない「仮説」であることを、忘れてはなりません。なぜなら「一般」が通用しなくなるような事態が確実に存在するからです。そして、倫理的に考えるとは、まさにこのズレを強烈に意識することから始まるのです。

伊藤亜紗『手の倫理』講談社選書メチエ 二〇二〇年 より（一部改変）

問一 この文章の中で、「倫理」と「道徳」はそれぞれどのような意味で用いられているか。二〇〇字以内で述べなさい。

問二 傍線部「ものごと」を一般化して、抽象化して捉え「ることがもたらす可能性と限界は、それぞれどのようなものか。具体的事例（ただし本文で言及されてる著者と息子のエピソードは除く）を挙げながら、あなた自身の考えを六〇〇字以内で論じなさい。